

シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第41回)

ベンチャー創業・支援活動の難しさ楽しさ

イノベーション推進本部 ベンチャー開発部長、上席イノベーションコーディネータ よねだ はるゆき 米田 晴幸

はじめに

私は化学系企業に長年勤めた後、産総研ベンチャー開発部に採用されました。企業では新規事業創出のための研究開発に長く従事していましたので、事業を創ることの難しさを十分理解していると自負していました。

ベンチャー支援活動の現状

ベンチャー開発部は、2002年から、産総研をベンチャー創出のプラットフォームとし、実際にベンチャー創出することも目指して活動し、累計115社のベンチャーを創出しました(うち新規株式公開1社、M&A10社)。私は実際にベンチャー創業のプロジェクト(タスクフォース)と一緒に遂行する中で、企業での新事業創出と異なった難しさを実感しました。ベンチャー企業では最初に狙う市場は小さいものの、スタート資金の乏しさ、人員・人材の不足などの困難があります。しかし研究者がもつ、技術で社会を変革したいという志はとても高いものがあり、これこそが創業への大きな力だと感じました。

ベンチャー支援活動の歴史(検証作業)

産総研の中期計画に従い、ベンチャー開発部のこれまでの活動の成果を外部委員の方々に検証していただきました。その結果は、1) プラットフォームの創生と多数のベンチャー創出は大きな成果である、2) 大きなイノベーションを達成できるように創出ベンチャー企業の支援をさらに重点化すること、3) 大企業が事業化しなかった技術を切り出し産総研のプラットフォームを使ってベンチャー化すること(カーブアウト事業)

業)の重要性が今後さらに増大するため本事業の積極推進を期待する、などに要約されます(詳細は7月以降に公開予定)。

3)のカーブアウト事業に関しては、2012年度最初の1件がベンチャー創業しました。大きく育ってほしいと願っています。

企業自身のコア事業やコア技術との関連が薄い、顕在市場が小さい、などの理由で企業では新規の事業化を断念します。しかし幅広い技術領域をもつ産総研では、一企業にとっては飛び地の技術でも産総研の技術との相乗効果で進展が望めます。また潜在市場を開拓するのがタスクフォースの重要な目標です。したがってコーディネーション(相手企業の上層部との信頼関係のさらなる構築、切り出した技術と産総研の技術とのマッチングなど)の推進で、産総研でのカーブアウト事業は大きく発展できると考えています。

今後の抱負

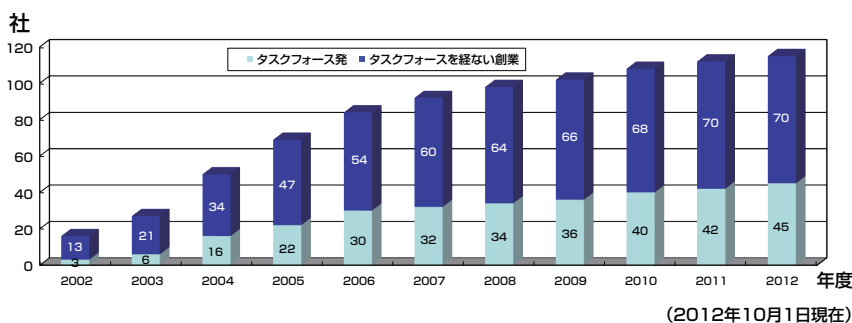
評価結果を踏まえ、今後もベンチャー創業・支援を積極的に推進し、大きなイノベーション創出を目指します。カーブアウト事業推進に関しては、企業の上層部への働きかけや技術の紹介などのPR活動を通してシーズを発掘し、次に事業化の成功例を蓄積することでカーブアウト事業の良好なパイラル的發展を果たしたいと思っています。

難しいベンチャー創業の支援活動ですが、困難さの中にこそ見えてくる楽しみ(技術が社会に出ていき、ベンチャー企業が成長していくこと)があります。今後もイノベーション推進の一翼を担うという自覚をもって活動を推進していきます。研究者、スタッフをはじめ全産総研、そして何よりも産業界の皆様方のご支援をお願いいたします。



産総研技術移転ベンチャー称号付与状授与式
右端が筆者

●称号付与企業数の推移



ベンチャー創業数(累積)